「事故から８年目の福島の現実に学ぶフィールドワーク（福島行動)」の報告

戦争と原発のない社会をめざす福岡市民の会
工藤　逸男

●福島事故から８年目を迎えている。事故に対する人々の関心は薄れ、記憶は明らかに風化してきている。街宣をしていると、事故があったことさえ知らない子どもたちに出会うことも少なくない。九州では川内原発に続き、玄海原発も再稼働し、九電は原発４基稼働体制となった。電気需要の減る秋口には、原発稼働を優先させ、再エネの出力抑制さえ計画している。私たちはこうした状況に大きな危機感を持っている。再稼働後の反原発脱原発運動を九州においてどう進めるか、その再構築を迫られているように思う。

今回の行動は、事故から８年目の福島に実際に行き、今、福島がどうなっているのかを自分の目で確かめる、というのが最大の目的だ。そして、そこで見聞きしたことを多くの皆さんに伝えていくというのが第二の目的だった。

●福島行動の参加者は６人。９月３日は東京に前泊し、４日は相馬市、５日は郡山市に宿泊し、２泊３日で福島県内をまわるというものだった。JR 上野駅から常磐線でいわき市まで行き、そこからはレンタカーで各地を回った。以下に私たちが訪ねたところ、お話を伺った方々を記す。

・経産省前テントひろばー木村雅英氏（再稼働阻止全国ネットワーク）
・楢葉町宝鏡寺　住職・早川篤雄氏
・富岡第二中学校および富岡町立幼・小・中学校避難開設先の「三春校」

（写真）富岡第二中体育館を玄関ドアガラス戸越しに撮影した。同中では 2011 年３月 11 日の午前、卒業式を終えた。午後に地震が起きたため、町民は体育館に避難し、ブルーシートを敷き、ストーブで暖をとりながら一夜を過ごした。ところが 12 日には、原発事故により全町に避難指示が出されたのだ。体育館はその時の混乱したままの姿を残していた。

・津波被害も受けた南相馬市、浪江町の各地
・希望の牧場
・飯舘村役場
・飯舘村前田地区　元酪農家・長谷川健一氏
・福島コミュタン

●私たちの放射線被ばく量－放射線計測結果

いわき駅に降り立ったホームから計測をはじめ、フィールドワークを終えていわき駅に

戻った時までを計測した。使用機器は岩崎通信機器(株)製造の「IWATSU　SV2000」。計測し続けた 50 時間の積算値は 4.03μSｖだった。 1 時間当たりの平均線量を求めると 0.08μSｖ。1 年間線量に換算すると 0.706ｍSv、というものだった（ちなみに胸部Ｘ線レントゲン検査 1 回の被ばく量は 0.06ｍSv ）。26 か所計測した地点で最も線量が高かったのは第一原発に近い国道 6 号線道路上の電光表示「2.226μSｖ/h」だった。

●ふりかえって、今、思うこと

2017 年 3 月 31 日、4 月 1 日に、避難指示が出されていた多くの村や町が避難解除された。しかし、私たちが訪ねた避難解除された村や町は、「復興している」とは到底言い難い現実だった。飯舘村の 2018/07/01 現在帰還者は 753 人（359 世帯)、元の人口比 1 割強。しかし、帰還者の 85％は 65 歳以上だ。夜になると周りの人家に灯はともらず、おはなしをうかがった長谷川氏は何度も「さびしい」という言葉を繰り返されていた。飯舘村には、今年 4 月から認定こども園、小中学校が再開し、あわせて 103 人が通っている。しかし、村内から通学する子は「片手ぐらい」（役場担当者）という数だ。その他の子どもたちは 10 人乗りワゴン車で村外から通学しているのだ。医療機関としては「いいたてクリニック」があるが、週 2 回午前のみの診療で、薬は隣の村に取りに行かなければならない。村内を移動販売車が回ってはいるがその回数はわずかなもので、立ち寄り停車する場所も限られている。

私たちが出会った方々は真正面から事故に向き合い、闘っていらっしゃる方たちだった。おそらくはみなさんそれぞれに、さまざまな苦しみ、さびしさ、困難をかかえていらっしゃることだろう。それでも自分のふるさとに戻り、なおも続くであろう放射線被ばくを覚悟しながら、自らの暮らしを再建し、福島の現実を伝え、原発のない社会をめざしていらっしゃる方たちなのだ。その重みを思い、私たちにおつき合いいただいた気持ちに、何よりも感謝の気持ちを伝えたいと思う。

今、「東京オリンピック」「復興五輪」が声高に叫ばれているが、その一方で原発被災した福島の現実は社会の端に追いやられるばかりだ。被災当事者ではない私たちができることは、彼らとともに終わらない原発事故の現実を伝え、反原発脱原発のたたかいや運動をさらに大きくし、原発なくせ！の国民世論を喚起していくことだろう。そのための一つとして、多くの人たちが福島に足を運び、原発事故被害を自らのからだと五感で感じ、確かめ、それを周囲の人に伝えていくことが必要ではないかと考える。